



ありがとう、ロータリアン！ ⑬ 国を超えて、輝く未来を



米山奨学生
キン コウラン
金 紅蘭さん

出身：中国
奨学期間：2011 - 13
学校名：岩手大学大学院（山形大学配属）
世話クラブ：鶴岡RC

私は中国の少数民族、朝鮮族出身です。故郷は、北朝鮮、ロシアと国境を接していて、異なる文化が混在する地域です。貧しい生活とはいえ、一人っ子の私は大学院まで進学させてもらい、好きな勉強に打ち込んでいました。日本へ留学してからは経済面、生活面で苦勞をしつつも、相変わらず、自分の夢だけを追って研究に励む日々でした。そんな私が米山奨学生として採用され、鶴岡ロータリークラブ（RC）の皆さん、そして、カウンセラーである「お父さん」、藤川享胤さんに会ったことで、少しずつ変わっていったのです。

日中関係が悪化するなかで

昨年2012年は、日中国交正常化40周年。両国の絆を深める年になるはずでした。しかし夏以降、尖閣諸島をめぐる衝突によって、過去に例を見ないほど日中関係は悪化してしまいました。私は、連日流れる反日デモのニュースを見ながら、日本で学ぶ中国人留学生として、また、日本のロータリアンから奨学金をいただく立場として、大変複雑な気持ちで例会場へ足を運びました。

鶴岡RCの皆さんは、いつも通りの笑顔で迎えてくれました。そして、お父さんがこう言ってくれたのです。

「ロータリアンの中には、反日デモをする国からの留学生に、これ以上奨学金を支給することは賛同しかねる、という方もおられます。でもね、お父さんはこう思っているのです。こんな時だからこそ、留学生の皆さんを支援させていただき、将来の日中友好の懸け橋の礎を築いていただきたい。心からそう思っているのです。それが



クラブの植樹祭に参加した金さん（前列右）

われわれ日本のロータリアンの大事な責務であり、米山梅吉翁のお心にかけていると信じています」

心の国境を超えるロータリーの精神、そして、私たち米山奨学生に対する期待と信頼感を含んだ、心に響く言葉でした。

意識の変化、「自分」から「社会貢献」へ

また、ある時にはこんな話もしてくれました。それは「奉仕のベクトル」という話です。

「たとえ奉仕に対する意欲や力の大きさが一人ひとり異なっても、考え方と気持ちを合わせれば大きな力になるんだよ」

私は鶴岡RCの奉仕活動に参加したり、お父さんをはじめ会員の皆さんからロータリーの精神を学ぶことで、次第に社会貢献への意識を高めるようになりました。

実は、米山奨学生に採用されてからも、自分を律するために週2回、早朝のアルバイトを続けていました。毎月少しずつ貯金をし、1年後、鶴岡RCの奉仕活動に使ってほしいと寄付を申し出ました。お父さんからは「背伸びをするな」と戒められましたが、受け取っていただきました。

ロータリアンはお金があるから寄付をするのでしょうか？ 貧しい人は金持ちから与えられて当然なのではないか？ いいえ、違います。私は、自分が寄付をして初めて、そこに喜びがあることを知りました。かつて両親

自分の夢を追って中国から日本に留学し、勉強に打ち込んでいた金紅蘭^{キンコウラン}さん。米山奨学生としてロータリアンと交流するうちに、“自分”だけではなく、“他人”にも意識を向けるようになりました。尖閣諸島の問題で急速に日中関係が悪化したときには、会員たちの変わらぬ笑顔と、国境を問題としないロータリーの精神に触れ、大きく心を動かされたと言います。米山奨学生としての卒業を間近に控え、今後の決意を語ってくれました。

から「与えられるより与える人間になれ」と教えられた意味が、ようやくわかったような気がしました。

現在は鶴岡ローターアクトクラブにも入会し、同世代の日本の若者との交流を深めると同時に、地域のための活動を共に企画・実行しています。

私が考える米山奨学生としての責務

米山奨学生になって、自分の夢だけを追ってきた私が奉仕の精神を学び、「人のために生きる」という目標を持つようになりました。大学の先生からは専門知識を学び、お父さんからは生き方を学んでいます。

奨学生として多くのロータリアンに接し、まれに感じたのは、「どうせ金の切れ目が縁の切れ目、奨学期間が終わったら音信不通でしょう？」という、米山奨学生に対するあきらめにも似た雰囲気でした。残念でなりません。

奨学生として、今後カウンセラーはもちろん、世話クラブへ便りをするのは当然の責務です。育てていただいた私が、今、何をしているのかを伝えなければ、米山奨学生に対するロータリアンの理解も広まらないと考えています。日本を一番理解できるのは日本にいる私たちであり、日本に最も好意を感じるのは、日本のロータリアンに支援してもらった私たち米山奨学生です。

私はこれから、中国をはじめとする農業経済に貢献できる研究者を目指します。そして日中友好の懸け橋の、

強固な土台になりたいと思っています。お父さんの娘として恥ずかしくないよう行動で示していきたいです。



藤川享胤氏から一言

金さんは本当の娘のような存在です。父の日に、母国の料理を手作りし、振る舞ってくれたこともありました。一緒にいると、私の方こそ彼女から多くを学んでいると気づかされます。近年、日中関係に軋轢^{あつれき}が生じるたび、中国人を奨学生として支援する意義に疑問を感じる方もおられるようです。ただ、心の底からの信頼関係は、一人ひとりの友情から芽生えていくものだと思っています。人を育てる事業には、今後50年、100年という長い時間が必要です。どのお国からの留学生であれ、米山奨学生を“支援してあげる”のではなく、“支援させていただいている”。それが、私の信念です。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見を、公益財団法人ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。
TEL：03-3434-8681 FAX：03-3578-8281
Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

40年前のベトナム出身の学友から感謝盾の贈呈



40年前の学友らが感謝盾を贈呈

昨年12月6日、ベトナム出身の米山学友5人とその家族が、米山記念奨学会事務局を訪ねてくれました。彼らが米山奨学生として日本で学んだのは約40年前のこと。その後、1975年のサイゴン陥落を機に、帰る国を失ったベトナム人留学生の多くが移民として世界各地に散らばりました。今回の学友のうち4人もアメリカ在住で、同窓会のために数十年ぶりに来日。忘れられない感謝の気持ちをぜひ伝えたいと、特製の感謝盾を贈呈してくれました。発起人のゲン・アン・トンさん(1973-74/姫路RC)は帰国後、「今回の旅で最も思い出深い訪問でした。感謝を伝える機会をいただき、本当にありがとう」とメッセージを寄せてくれました。